

日本商業教育史上の二の文獻

田 崎 仁 義

大正十四年、日本は其の商業教育史に關する二つの重要な文獻を生んだ。

一、日本商業教育五十年史

二、一橋五十年史

是である。前者は明治八年東京商法講習所の創立によりて我國に始めて商業教育が開設せられて以來今日に至るまで半世紀間の商業教育全般に亙る進歩發達普及の事蹟の骨髓に關する最も精細にして周到なる記述であり、後者は東京商法講習所に其の端緒を發し現在の東京商科大學となつた所の所謂一橋疊の發展向上の最も精彩あり生命ある物語である。吾人は我國商業教育に關する此の二つの大に意義ある文獻を手にして感慨轉た深きものあるを禁することが出来ない。茲に二書の梗概を

紹介して本會會員諸君に其の閲讀を薦めたいと思ふ。

日本商業教育五十年史

東京商科大學長法學博士

佐野善作著 同大學發行

本書が、本年九月を以て創立五十周年を迎へて頗る盛大にして且つ最も意義深き祝賀の式典を舉げたる東京商科大學の紀念的出版であると共に、其の著者が同學々長佐野善作先生であると云ふことは、極めて適當なる時と人を得たるを喜ばざるを得ない。博士は其の序文に述べて居られる「吾人は其の幼稚なる創業より今日の盛運に達したる發達の跡を顧み、我邦商業教育の進歩の狀を觀るときは幾多先進の功業努力を銘記すると共に後進の

責任重且大なるを感せずんばあらず、今茲に我國商業教育五十年史を編纂して梓に上すは其間に於ける發達の跡を録して古きを溫ね新しきを知るの一資料たらしめ併せて以て右紀念の微意を表せんとするに外ならず」と、實に紀念祝典の行事に於て最も大なりとなす可きは、其の事業の創始より現狀に到達したる變遷發達の跡を回顧するより切要なるはなし。而も十年十五年の事業ならば記憶を辿りて往時を觀望回顧するも尙ほ足らずとせざるも、二十年三十年と星移り物變れば、往昔のこと漸く茫漠たらんとするに至るのである。況んや半世紀の長歲月を閱するに至れば、益々正確なる記録を作成して過去の狀況先進の功業努力の跡を顯彰して所謂溫古知新の必要が大となるのである。然るに世の各種の團體諸方の事業が此種の紀念祝賀會を舉行するものを見るに、多くは御祭的に流れ、飲食の盛宴を重しとして、一時の世間騒がせをなして以て能事了れりとするもの比々として然らざるも

のなきの觀があるのは吾人の私かに嘆嗟に堪へざる處であるが、然るに今商大が其五十年祝典を舉ぐるに當つては、二つの特色ある行事をなして世に好模範を垂れて呉れた。其の一つは、功勞者の追悼式であり、他の一つは此の五十年史編纂の事業である。其他の各種の催も甚だ結構であることは申す迄もないが、此の二つの行事があるので、此祝典をして更に其の意義を崇高深遠ならしめたことを吾人は心から喜ぶものである。我國の商業教育の歴史は法學、文學、農學、工學等の教育の歴史が比較的平夷なる順路を経て來たとは異り、可也崎嶇たる峻坂險路を通過して來たものである。其の發達の跡には内外共に幾多の波瀾もあつた。士農工商と云ふた封建時代の舊き因習の抜けきらなかつた爲めであつたか知らないが、官府の有司は商業教育を繼子扱をするさへ一部の人から謂はれた時期をも通過して來て居る。而も斯かる辛酸を飽く迄嘗めて敢て退轉することなく不屈奮發して

今日の盛況に達し、五十年前呱呱の一聲を舉げた東京商法講習所は今日は嚴として世界の商業教育界に於ても屈指の重鎮たる東京商科大學（學生人員八二一名同豫科六三九名）となり、又た公私大學にして商科を設けざるもの甚だ少く其他に官公私立の高等商業學校十校（學生人員約七千五百名）中等程度商業學校は甲種乙種合して二百數十校の多きを致したのは實に偉大なる發展と云はねばならぬ。而して此の五十年間に此等の教育機關によりて養成せられたる人材が、我が帝國の商業經濟の各方面を擔當經營して我國をして今日あるを致すに與つて如何に大に力あつたかは多言を要せざる所である。されば商業教育五十年の歴史其者が其自身としても亦た我帝國最近五十年史の一部としても實に甚だ意義あるものであるのであつて、而して是事に其の緣故最も深き商大の今回の祝典の際に其の歴史が編纂せられたことは最も時と所とを得たと云はねばならぬ。而も其の筆者が同校出身に

して而して三十餘年其の校の教育に携り現に學長の職にある佐野博士であることは甚だ其の人を得たりと云はねばならぬ。惟ふに我國商業教育に關聯し之に功勞あり經歷ある人も多々あり従つて其の歴史の執筆者として適任なる人も決して少くはないであらうが、中に就て最も適當と考へらるゝは、澁澤子爵、水島前神戸高等商業學校長及び佐野博士の三氏である。然し澁澤子爵は其の功勞は直接間接に甚だ大なるものがあるけれども、既に高齢でもあられるし、直接筆を執つて戴くことは望む可きであるが求む可からざることであると思はれる。水島先生には執筆をお願いすることは望む可からざるにはあらざるも、既に前年經濟大辭書に我國商業教育制度組織に就て詳細周密なる記述を發表して居られることでもあるし、今や商大の五十年を祝ふに當りて、現に學長の地位にあられ、且つ以前から深く其の意を此の歴史の調査研究に潛めて居られ、大正十一年に一度『日本商業教育略史』

の著を公にせられたる佐野先生が公務多端の間をも意とせずして奮つて此の任に當られたのは實に最も其の人を得たものであると云はねばならぬ。

偕本書内容の一般を紹介すれば、

一、商業教育に關する最初の法制と最も早く設立せられたる商業學校、二、商業學校通則の發布と中等高等商業教育の分岐、三、實業教育國庫補助法及實業學校令の發布、四、高等商業教育、五、專門學校程度以上の商業教育、六、大學程度の商業教育、七、商業補習教育、八、女子商業教育、九、商業教員の養成、十、商業教員の資格、の十項目に分ちて「我邦商業教育の鳥瞰圖を示すことを目的とし、専ら正確なる事實の記錄に努め敢て意見を附することを避けたり、然れども所載法規及び史實の連絡を索め又は其の内容を説明せんが爲め著者に於て私かに解説を試みたる點なきにあらざる」ものであるから、其の本體は商業教育に關する過去五十年間の法令規程

を彙集叙次したものであるが、然し潛心讀み進めば其間に自ら津々たる興味もあり、轉た今昔の感を催すものもある。冒頭第一に實業教育に關する明治五年の布告が抄掲せられて居つて、其の主旨と云ひ文體と云ひ、如何にも五十餘年前の狀況を想起せしむるものがある。曰く「人々自ら其身を立て其産を始め其業を昌にして以て其の生を遂ぐる所以のものは他なし身を修め智を開き才藝を長するにやるなり。而して其身を修め智を開き才藝を長するは學にあらざれば能はず、是れ學校の設ある所以にして日用常行言語書算を初め士官農商工技藝及び法律政治天文醫療等に至る迄凡人の營む所のこと學あらざるはなし。人能く其才ある所に應じ勉勵して之に従事し而して後初めて生を治め産を興し業を昌にするを得可し、されば學問は身を立つる財本とも云ふ可き者にして人たるもの誰か學ばずして可ならんや。夫の道路に迷ひ飢餓に陥り家を破り身を喪ふの徒の如きは畢竟不學よりしてか

ゝる過を生ずるなり云々……又士人以上の稀に學ぶ者も動もすれば國家の爲めにす唱へ身を立つるの基たるを知らずして或は詞章記誦の未に趨り、空理虚談の途に陥り、其論高尙に似たりと雖も之を身に行ひ事に施すこと能はざるもの少なからず……今般文部省に於て學制を定め追々教則をも改正し布告に及ぶ可きにつき、自今以後一般の人民必ず邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめんことを期す。人の父兄たる者宜しく此意を體承し其愛育の情を厚くし、其子弟をして必ず學に従事せしめざるべからざるものなり」とあるが如き所謂隔世の感あるものであるが、而も當時の新進有司の思想や抱負の一端も現はれて居り堂々蕩々たる王道的态度が朴實敦厚なる言句の間に隱見して居るなどは先づ以て深く吾人の興味を催したる點である。翌六年の學制の商業學校教科として豫科には語學、算術、通商地理、博物、物理、數學、記簿法、通商書信、反譯、體操の十科とし外に歴史、

經濟、修身、國體等國書に就て學ぶ可しとあり、本科には記簿法、算計法、商用物品辨識（其原因、其使用、其性質、其種類、其の價值、其眞偽、其試法）商業學、商法、等が擧げられてある。其學科の名目や配合を見ても少なからざる興味を感じさせられるのである。此の外、明治七年大藏省銀行課中に設けられたる銀行學局の授業科目、其の教科書名等も面白いが、其の規則第一條が又た甚だ痛快である、曰く「此一部の官員たらんとするものは年齢十六歳以上二十歳以下にして洋書普通學の讀書作文等一通り差支なきものにして性質敏捷後來成業の目途あるものを選び先づ御雇の名義を以て選舉し追々其技倆に應じて給階を進むる等紙幣頭に具狀して其差圖に任ず可し」とある。又た森有禮氏が東京商法講習所を起した時に福澤諭吉氏により紹介せられたる設立理由書あり。同所創立當時の教科書プライアント氏ストラントンの帳合法、ウキランド經濟書其他の教科書目あり。明治十一

年一月神戸商法講習所、同年三月三菱商業學校、十三年大阪商法講習所、十五年橫濱商法學校、十六年の新潟商業學校の設立や其の教科目、又た十四年東京商法講習所が經費の支出に困難を來せし際澁澤榮一氏は我政府が夙に工部大學を工部省中に設け又農學校を駒場に置き、職工學校を文部省中に設くる等、農工の業を訓導督勵せらるゝや實に厚きに拘らず、獨り商法學校に至りては未だ措て顧みられざるを遺憾とし建議して之を農商務省の直轄となすに至りたること、明治十七年の商業學校通則の發布、十八年東京商業學校が農商務省より文部省に移管せられ、神田一橋の校舎に移り、以來今日の商大に發展する基を開きたること等皆な其の要を摘記し、爾來各等の商業教育が次を逐ふて發達普及したることを法令規定を中心として叙述してあるのであつて、所謂我邦商業教育の鳥瞰圖として甚だ貴重なるものであるのみならず、溫古知新の目的も之によりて克く之を達することが得ら

れると思ふ。が只だ、各高等商業學校の現行學科課程には幾多の誤謬の存するものあるのは甚だ残念の事である。例へば長崎高等商業學校に就て現行學科課程として掲記してあるものの如きは、眞の現行のものとは著しく相異するものであつて、必ず數年前の同校一覽に依られたものであらうと思ふ。即ち科目の數及び種類に於て大差異あるのみならず、教授時間の總計に於ても一年二年が三十四時間三年は廿八時間なるを同書には何れも三十五時間としてある様な次第である。尙ほ小樽、山口兩高商に關するものにも略ぼ同様な誤謬があることを發見した。其他のものは一々現行一覽と照合はしなかつたが、新設學校のものには餘り左様な誤謬は見付からぬ様であつた。是れ或は大正十一年公刊せられたる日本商業教育略史を編述せらるゝ當時に現行教科課程なりしものを其儘にして置かれたのではなからうか。即ち補訂の際に此邊まで手を入れる邊がなかつたのであるまいかと思はれる

白玉の微瑕で甚だ遺憾な事である。

然し全體として本書の價值は右の如き微瑕によりて決して損せらる可きものではなく、我國商業教育に關係ある教育者學者學生の爲めには勿論廣く我が教育界にとりても極めて有益貴重なる文獻である。公務多端の間に斯かる著述を、此の意義ある時期に公にせられる著者博士先生に向て深く其の勞を感謝せなければならぬ。私が此の紹介の筆を執るに至つたのも此の欽喜と感謝の念の禁じ難きものあるに出でたのであるを諒とせられたい。

(忘評多罪)

一橋五十年史

一橋五十年史編纂委員編纂

東京商科大學一橋會發行

本書も亦た、商大五十年周年紀念祝典に際して、「一橋の過去半世紀を回顧して學生生活を中心としたる一橋發展の歴史」として、「一橋を一の總體と見て、其處に一貫した五十年の

澎湃たる流を寫し出さんことを目的とし」て記述編纂せられたものであつて、此が編纂の史料としては、『一橋會雜誌』、『一橋』、『一橋四十年史略』、『同年表』、を始め、『學校一覽』、『同窓會雜誌』、『如水會報』、『矢野次郎傳』、『明治商工史』、『開國五十年史』、『學制五十年史』、『日本商業教育略史』、新聞、其他數種のものを採り、又た同校出身先輩及び關係者數十氏の援助により、編纂委員たる石川治良氏以下十八名の學生諸君が周到なる用意を以て、學業多忙の裏に東奔西走して材料を蒐集し、之に整理、執筆に暑中休暇も故山に歸らず、酷暑と戰つて非常なる精勵刻苦の結果出來上つたもので、極めて精彩ある一橋變生活の五十年史である。其内容を見るに第一期は、明治八年に京橋區尾張町の一練瓦屋（鯛味噌屋）の二階を僦りて、商法講習所が呱呱の聲を揚げてから同十八年に文部省の直轄となり一橋に移る迄、第二期は前期に引續き同三十年專攻部が設置せらるゝに至る迄の即ち、學校制

度が整備擴張せられたる迄の時代、第三期は專攻部設置より所謂申酉事件と稱せらるゝ專攻部廢止勅令によりて、學生總退學等の大動搖を來した事件の落着せる時―四十二年―迄第四期は其後大學昇格―大正九年―迄、第五期は商科大學制布かれてより現在―大正十四年九月―に至る迄と六期に分ちて、頗る詳細に其の間の辛酸、波瀾、試練、奮闘、精進、發展、向上の跡を記述したものであつて、意氣と精彩とに充ち満ちて居り、血と汗と涙と精力と暗雲と光輝とに彩られたる開けば唸りを生じ、讀めば生命の波打つ處の一つの偉大なる活文字である。紹介批評の目的で筆を執て居る筆者も、何時しか筆を投じて書中の人となつて小半日も續けて耽讀してしまふ様な次第である。一橋生活の澎湃たる大流、一橋精神の陸離たる光彩は、實に一大ヒルムとして眼前に開展せられて行くのである。一橋の歴史は古い、世界に高級な商業教育を施す學堂として、最古のものは一八二〇年創立の佛

國巴里高等商業學校であり、一八五二年の開校の白耳義アンヴェルス高等商業學校に次いで、一八七五年創立の日本東京の高等商業學校である。今日列國に幾百千と散在して居る商科大學や高等商業學校は皆な、此の三兄の末弟であり後輩であるのである。講習所より商業校へ、商業校より高等商業校へと向上の一路を辿り出した一橋からは、當時幾多の英才が歐洲各地に留學した。明治三十年三月福田德三の獨逸留學を初めとして同年六月に佐野善作英米へ、翌年八月關一白耳義へ、三十二年七月石川文吾白耳義へ留學を命ぜられた。此等卒業生は母體一橋の發展について細心の注意を怠ることなく、常に歐米の新傾向を取り傳へては警めの叫となすことを忘れなかつた。三十年の春福田德三はミュンヘンから譯文「高等商業教育論」を小山校長に、翌年十一月「歐米商業教育近況」を同窓會雜誌に送つて來た。尙彼は三十二年六月伊太利ベニスに開かれたる國際商業教育會議に列席し

世界の進歩して行く線上から一橋を一步も遅らせまいと努めた。關一も亦「歐米商業教育の概況」なる報告文を文部省に送り、石川文吾は同年十二月「アントワープ府の商業學校」を同窓會誌に寄せた。佐野善作は倫敦經濟學校に於て商業教育に關する講演をなし、其の速記録中日本に關する部分が英國文部省の年報中に掲載せられた。

・ 感じ易いのは學生の心である。既に何等かの形に於て躍動せんとして居た一橋は、斯ふした海外からの主張と警めの叫が校畔に鳴り響いた時、更により高き目標に向て邁進せずには居られなかつた。工科大學、農科大學の存在を見るに、商界の指導者を養成す可き商業大學を見ざるは國家の爲め大に、遺憾とするとは時の學生の心であつた。時しもあれ三十三年七月一日、商議員男爵澁澤榮一の還暦並に授爵祝賀會が同窓會の主催に依りて開かれ、其席上、彼は一場の演説をなして一橋商業大學の主張を表明した。茲に於て商業大學

論は一部の教授學生間の問題でなくして、全日本の公問題となつた。斯くの如くして商業大學必要論、母校昇格論は或は同窓會の決議となり、或は「伯林宣言」となつた。其の中に關、佐野、福田の諸教授は相踵て歸朝し、學問に於て識見に於て萬丈の氣焰を吐いた。そして講壇の上からは盛に Captain of Industry が叫ばれ、個人完成主義が力説され、「實業の統帥」は總ての一橋人の目標となつた。世間には未だ隨分謬論もあつたが、然し商業大學の主張は一步一步確かな步調を以て進んで行つた。三十四年六月には專攻部卒業生には商業學士の稱號を附することになつた。しかし一橋の主張し來つた一大精神は、斯る學士號などの些事ではないのである。鬱勃たる一橋發展の意氣益々其の熱度を高めて、商業大學の出現も遠くはあるまいと思はれた。三十六年滿洲の野に風雲怪しく動て闔國の大難は迫つた。今は國を擧げて此の難に當らなければならぬ。愛校の一橋は亦た愛國の心火に燃へ

て、しばしは總てを放擲して國の爲めに動いた。三十八年戦は終へて國民は皆な戦勝の歡に酔ひて其の所を忘れたが、一橋は獨り再び、其の行く可き道に向つて猛進した。四十年新歸朝の教授堀光龜は「商業大學必要論」を草して同窓會誌に發表した。斯かる狀勢の下に於て一橋會の設立運動が起り、明治三十五年十一月一日に其の創立大會を開いた。三十六年三月には其機關雜誌たる一橋會雜誌は發行せられた。茲に於て一橋生活は更に刷新せられ、六々黨なるもの現れて大に活躍し、「吾人屁理屈を知らず、幸にして元氣あり」の motto を眞向に振りかざして、或は鐵拳制裁を行ふて不都合なる分子を膺懲し、或は「討露の歌」を作りて、出征兵士の士氣を旺ならしめ、或は福田教授が松崎校長と意見の疎隔によりて休職せられたるを慨して、猛然蹶起して復職運動をしたりする等學生の意氣を作振した。他方には一橋會歌が出来、端艇部は横割を改めて H. C. S. の縦割制を採用して、一

大發展を遂げ、銚子遠漕は年々の冬期に行はれ、四十年十二月三十日には舊艇朱雀號、利根川隨一の難所寶山沖の覆没の悲惨事があつたが、士氣は益々揚つて劍道、柔道、庭球、英語各部皆な大に鍛練向上し、更に研究部を新設して、校風論、個人完成主義、一橋國家主義、國民的自覺論、武士道鼓吹論等續々現れて、悲憤慷慨の聲堂を搖し、適々講演を依頼せられて來場した朝野の名士學者をして、一橋向上の意氣の凄さに一驚を喫せしむるの狀を呈した。而も、一橋精神の統一的代表機關は編輯部によりて發行せらるゝ『一橋會雜誌』で、冊々、頁々侃々諤々校風を論じ、商業大學論を主張し、之に對し或方面からの甚しき壓迫を受けたに拘らず、毫も屈する所なく最も強硬に戰を續けて一橋精神を主張した。之に關聯する投書家懇親會も亦た、此れ位男らしい會合は他に類例を見ず。と、流石の福田教授をして嘆美せしむるものがあつた。東亞傳導部は出來て、年々の夏には海外視察の

學生は東洋の一半に足跡を印した。六々黨員二名は三十八年六月鎌倉に參禪し、森嚴なる禪坐生活に大に得る所あり、校風刷新は斯の道に如かずとして翌年は更に校友を糾合して大舉參禪した。之が一橋如意團の創始であつて、一の毅然たる精神國體は結束せられた。後大雄團、徹心會も起つたが、皆な如意團と同體異名のものである。他方に一橋基督教青年會がある。三十八年の秋其の一會友が支那に赴任して、楊子江に悲慘なる死を遂ぐるに遇ひ、會員は一種のインスピレーションに打たれ、蹶然として奮起し大に傳道と修養に力めた。一橋の此時代は最も多事の時であつた此勢内に燃えて一橋の帝國主義、校風改革の論となり外に奔騰して商業大學の主張、產業界の霸權掌握となつた。今は唯最高の理想に向つて進まんのみである。然るに時なる哉、茲に突如現はれたる障壁に衝突して一橋の奔流は、遂に激して萬丈の逆浪を生んだ。是れ申西事件である。申西事件とは、文政當局が

一橋三十年來の光輝ある歴史と天下の公論とを無視して遂に、一橋十年來主張し來れる商科大學昇格の希望を無理解にも蹂躪したるのみならず、專攻部廢止の勅令を發したるによりて起りたる、明治四十二年春の大事件で、遂に四教授は是が爲めに辭表を提出し、學生は五月十一日總退學を決行するに至つたものである。五十年史は其の日の記事を次の如く書いて居る。

斯くて十二時十五分に至り扉は開かれ、委員は悲壯の意氣と沈痛の決心とを以て現れた。時に天は愈々暗く、凄愴の氣は徐ろに晩春の校庭を籠めた。徳野委員先づ廊下に起つて、肅として其の言を待つ學生に臨み、悲痛なる音調にて委員會の三ヶ條の決議を報告し、血涙を揮つて母校の最後を宜した。……言々句々、熱誠溢れ至情迸り、感極つて直立せるまゝ、涙滂沱として頬を傳ふるのが見へた。滿庭の學生亦た聲を吞み唇を嚙んで、一人の語を發する者もない。……

委員の主唱により一同國歌を合唱し、更に一橋會歌は彼等の唇を洩れた。「ああ——一橋空高き、母校の春の朝ぼらけ、……」聲はやがて涙と變じ感極つて慟哭地に伏し相抱て、校畔しばし歔歔の聲に満ちた。次で涙を振つて大日本帝國萬歲、東京高等商業學校萬歲を三唱して……永遠に此の地を去つた。

此事件も高商々議員、父兄保證人會、及び東京大阪橫濱神戸京都の五商業會議所代表委員の三團體の奔走盡力によりて、學生は復校し專攻部は存續せらるゝに至り、大正九年四月遂に一橋は名實兼備の單科大學となつた。私は初め本書の發行を紹介し、内容の主項目を示す程の考で筆を執つたのであつたが、遂には不知不識書中の人となり、單なる紹介者の職分を超へて、私も亦た本史の記者たるが如きの域にまでも筆を走らせた。本書が吾をして斯の如くならしめたか、吾れが自ら斯くの如くなるに至つたか、吾れ其の然る所以を知

らないが、然しながら、私は斯かる紹介の態度も時としては決して排す可きにあらずと信じて居る。第五期商科大學制布かれてより現在に至る迄の記事に就て見るも、「一橋は眞の價值追求の方便として制度としての大學を要求し來つたのであつて、社會的地位を求めたるの歸結ではなかつた。制度の改革と共に如何なる内容を有する商科大學が建設せらるゝかと云ふ事は、學生の刮目注視して居た處で、若し何等の創意なく、研究なき大學の形骸を見やうものなら、日本文化の源泉地を以て自負して居た學生は、正に慚死す可きであると信じて居た」のであつたから、學則改正問題が又た非常なる勢を以て論議せられた。又た新豫科自治運動もある。専門部存廢問題も起つた。而して大正十二年九月一日の彼の大震火災、學園復興運動、豫科の石神井へ移轉、一橋新聞の發刊、一橋各部の發展の蹟が、詳細に且つ向上の意氣に充ち満ちて書き誌されて見へる。尙ほ一橋五十年史年表、一橋會其

他各種の會則及び數十篇の會歌、寮歌、應援歌等約一百頁の附録が付て居る。

之を要するに、本書は、一橋五十周年を紀念するに、極めて相應しい、生命に充溢したる、堂々たる、學校生活史であり、發展史である。其骨髓たる一橋精神を完全に體得したる者でなかつたならば、なか／＼是れ丈けのものかとても出来るものではない。此點について私は深く編纂委員諸君に敬意を表さなければならぬ。又た其の體裁と云ひ、文章と云ひ、殆ど申分がない。否寧ろ嘆賞するに足るものである。只だ然し、吾人の見る所を以てすれば、卷頭の字寫の中に、故村瀨春雄其

人を加へたかつたことと、史料の提供をもつと廣く中央地方の別なく、適當な方面の人に求めたならば、更に一層間然する所の無いものが出來たであらうにと思ふのである。

最後に私は、滿天下の學生、其父兄、教師、學校管理者、文政關係者を始め、政治家、操觚者及び各方面の指導者に切に此の書を讀まれんことを勸めて已まぬものである。

一橋黌五十年の生活は、克く此書を生んだ、商大を始め、廣く天下の學校生活は、此書の讀まれることによつて、必ずや貴重なる何者かを付け加ふる所があらうことを、吾人は斷言して此筆を擱くものである。

株式
會社 京都取引所譯 紐育株式取引所

研究館編纂室

株式組織の企業勃興し、株式放資が年を逐うて盛なるに及び株式取引所が財界樞要の公

共機關として益々重要視せらるゝに至るは、自然の順序である。されば株式取引所に於け